

「道」の陰陽五行思想から読み解く時間と空間の感覚について
 —近世までの日本人の聖地信仰を理解する手掛かりとして—

川合泰代（明治学院大学非常勤講師）

本発表は、近世までの日本人の聖地信仰を理解する手掛かりとして、中国発祥の「道」の陰陽五行思想を用いることを提案したものである。近世までの日本文化は、中国文化を手本とし、それを日本化していたものであることから、この視点は有用であると考えられる。

中国文化の根幹には、「道」の思想がある。「道」とは、言葉にはできないものの、あえていえば、生命の源、のような意味がある。日本人の文化にも、神道、修験道、お天道さま、道を極める、道徳、等々、「道」という言葉は浸透している。

本発表ではまず、老子の語ったとされる「清静経」から、「道」の思想を紹介した。次に、法則のようなものである道理から、形のない気が生まれ、気から目に見える形である象が生まれる構造を説明した。道理として、まず陰陽の説明をした。陰陽とは、相反するものが二つで一つとなり、それらが常に変化し続けることにより、生命が生き続けるという法則である。もうひとつの道理として、五行の説明をした。水・木・火・土・金の五つの要素の、相生と相剋のバランスにより、調和が成り立つという構造である。土が真ん中になる五行の変形図も説明し、これが都城の説明などで一般的に用いられる風水の図の原型であることも説明した。最後に、干支の干であり、天の理気を表す10の天干と、干支の支であり、地の理気を表す12の地支を説明し、これらが共に陰陽五行の要素の組み合わせで成り立っていることを説明した。

次に、この干支を用いて、天の気を表す時間、地の気を表す方位、人の宿命を表す八字（四柱推命）の説明を行い、天地人の性質をすべて同じ言葉で説明する世界観を説明した。

最後に、近世江戸の富士講の人々による富士山信仰を、庚申という干支を用いて読み解いた。古くから、富士信仰において申を重視する文化は存在したが、江戸の富士講では、60年に一度の庚申の年に富士山に登拝することが流行した。庚の陰陽五行の要素は金の陽、申の陰陽五行の要素は金の陽であり、干支が共に金の組み合わせは庚申のみである。また、江戸からみた富士山の方角は、24方位という方位盤を用いると、庚申の方位にあたる。また、近世江戸の富士講からみた富士山の意味は阿弥陀仏の住まう西方極楽浄土であり、これも西の金の意味がある。つまり、年も、方位も、目的地の意味も、すべて金一色で統一された信仰文化であったことが明らかとなった。

以上のように、本発表では「道」の陰陽五行思想を用いることで、近代以降の日本人が手放していった日本人の聖地信仰の源流を再発見できる可能性を、事例を用いて提示した。